

平居 謙

花鎮め

—ささやかなる天変地異のために

戸口

古き郵便箱の中に
一片の花弁

Rの文字^{もんじ}

街頭灯り初めし
自刻の

石化したる肉球
のやうでもあり
連射されし弾丸の
痕跡にあらぬとも
言い切る由もなく

いよよ
落魄の予感に満ちて
春

在りし日の
恋
の如く

いまだ知らぬ愛人と
再び見ゆる日の
騒めきの中

眠られぬ夜の
をみなひとり
ひた走り
去りゆけるあり

＊

朝

花鎮め